

ラスキンの職分經濟學 (下)

—Unto This Last の構造

大熊 信 行

I

ラスキンにしたがへば、價值、富、價格などといふ經濟學上の基礎概念とともに、重要なものは生産物の概念である。しかるにこれらはいづれも一般人が理解できるやうには述べられてをらぬ。——生産物とは何であるか、ジョン・スチュアート・ミルはこの根本問題に答へんとして、矛盾に陥つてゐる。ミルは言明して經濟學は哲學的または道德的考察と關係がないといふ。しかるにかれの推理の中には暗黙のうちにさういふものが導入されてゐるといふのが、ラスキンの所見である。果してラスキンの所見は正當であらうか？ ラスキンのミル批判は第四論文『價值に従ひて』Ad Valorem の冒頭からはじまるものであるが、われわれはまづラスキンの批評の對象となつたミルの學說について、ラスキンを離れて直接に考察する必要を感じる。問題は四段にわかれる。第一、ミルは一體何を述べてゐるか？ 第二、ラスキンはそれをどう理解したか？ 第三、ラスキンのミル批判は正當であるか？ 第四、ラスキン自身の思想は何であるか？

まづ第一に問題の箇所において、ミルは一體何を述べてゐるか？ それはかれの『經濟學原理』(J. S. Mill:

Principles of Political Economy, with some of their applications to social philosophy, 1848) 第一卷第四章『資本』と題し、三節より成るにあたる部分である。ミルはそこで資本家の一例として鐵器製造家を擧げ、その資本家がいつも商賣上の利得の一部を費して銀器を買ふならひであつたのが、考をかへてその額を『生産的勞働者』の方へ用ゐるにいたつたものと假定する。この假定はあだかも銀器の生産は生産でなく、したがつて銀器は生産物の一種として認められてゐないかのやうな印象をあたへるものであり、——すくなくともラスキンはそのやうな印象をうけとつた箇所なのである。しかしわれわれはラスキンの引用に依頼してミルの眞意をたしかめないのでおくことはできない。問題は重要であるからして、長きをいとはずミルの眞意をつぶさに檢してみなければならぬ。讀者にたいしては一應ラスキンを離れ、しばらくミルの問題に注意を轉じられるやう乞はなければならぬ。

ミルの『原理』第一篇はいはゆる生産論である。前後十三章から成り、第二、第三の兩章は勞働を主題とし、第四、第五の兩章は資本を主題とする。問題の箇所が第四章であることは一言したとほりであるが、しかし第四章の理解にとつて直接不可缺の前提をなしてゐるものは第三章である。それは『不生産的勞働』と題することく、主として『生産』の語義を中心とするものであるからして、ミルにおける『生産』または『生産物』の語義の曖昧を指摘しようとおもふならば、ラスキンは第四章から問題を引きだすべきではなくて、むしろその前章にさかのぼるべきであつた。われわれはミルにおけるそれらの語義をまづ確めるべく、第三章の要旨を概観することとする。

II

『不生産的勞働』に關するミルの所説は次ぎのやうなものである。

マカロックやセイにしたがへば一般に『不生産的』といふ用語は廢すべきである。たとひその結果は物質的對象において感知されずとも、出費に値する福利を齎す勞働はすべて生産的である。その旨とするところは、官吏・軍人・醫師・辯護士・教師・音樂家・俳優・家僕などの勞働は、これらの人々にして給料に相當するだけの働きをなし、しかもその人數が必要以上に多くないならば、これらにたいしてあだかも不經濟、または無價値を意味するやうな『不生産的』といふ汚名を着せるべきではないといふにある。しかしミルによればこれは問題を誤解したものである。生産が人生の目的の全部ではない以上、『不生産的』といふ用語は必ずしも恥辱と考ふべきではない。にもかゝらず、意見の相異にもとづかぬ場合でも用語の相異は、一つの眞理の異なる部分に讀者の注意を集めることになりがちだと、さういつてミルは事實上眞理の一面に讀者を導いてゆく。

——われわれが生産するのはつねに效用(利用)であつて、物そのものでないのはセイのいふごとくである。しからは效用(利用)を生産するすべての勞働はこれを生産的なりとすべし、といふのがセイやその他の學者の意見である。人間の手足を接ぐ外科醫や安寧を齎す裁判官や生計の道を教へる教師にたいしては『生産的』といふ名を拒み、味覺の瞬間的快樂のためにボンボンをつくる菓子屋にはこれをゆるすといふのはどういふわけか？

しかし問題は單なる效用にあるのではない。效用が一定の物質と結びついてゐるか否かにある。『生産的』といふ用語は省略された表現であつて、これは物質的富の生産にかゝはる意味をひそめたものである。物質的生産を

目的としない労働であつて、高度の有用性をもつたものは少くない。しかし物質的生産にかゝる労働をそれ以外の人間労働から區別し、労働を二大別して生産的・不生産的とすることに理論上の理由がある。

ミルによればそもそも労働の生産する效用(利用)には三種の別がある。第一はなんらかの物品に體現されるもの。第二は人間に體現されるもの、——すべて人間の教育および教化に關する一切の労働はこれに屬し、國民の向上のための行政的活動もこれに屬する。(この場合、家婦または母における哺育の労働のときが第一に包括されるべきであるが、ミルはしかし例示してゐない。)第三は物質または人間に固着せしめられることによつて物または人の存在とともに永續することなく、效用そのものの發生とその享受とが同時であり、したがつて一般にその場かぎりのもの、——それは人または物に永久的な改善を遺すことなく、労働過程それ自體が直接に效用として享受され、その過程の終るとともに享受も終り、そしてその結果が享受者の將來に何かを遺すのではなくて、その場かぎりの満足としてのみ考へられるもの。

こゝの叙述はミルの説明を一段正確に書き更めたものであり、拙著『文學のための經濟學』における藝術の享受過程の分析的叙述とも通ずるのであるが、讀者はミルの原本と對照されることが望ましい。ミルはこれらの例として音楽家・俳優・演説家・見世物師等を擧げた。客はいづれも即時の快樂を求めて料金を拂ふのであつて、將來のために有利な効果を求めるのではないといふのである。いふまでもないが、それらの娛樂における即時的効果と、教育的または教養的效果との限界は實際上困難であり、この點に關するミルの考察は遺憾ながら決して十分なものだといふことはできない。また音楽家や俳優における演技の過程が、今日においては物體化し、したがつてミルの思ひもおよばぬ方法によつて永續性を帯びるにいたつた一般的事情については、これまた機械の發明

による現代藝術の存在形式の變化および發展に關する問題として、右の拙著において廣く考察したところであるから、參照を乞ひたいとおもふ。

しかしこゝでは一層根本的なミルの思想に觸れなければならぬ。それは一面では經濟理論の構成に關するかれの思想であると同時に、他面ではかれの政治思想である。およそ經濟學における理論體系の構成なるものは、一定の政治思想を契機とすることなしに到底成りたつものでないのであるが、この場合もまた美事にそれを證明するものだといふことができる。しからばミルの政治思想はいかに決定的にかれの理論構成に作用してゐるか？

ミルは第三の範疇に屬する人間勞働として俳優や見世物師を擧げたのちにいふ。——『また陸海軍人の勞働についても同様である。彼等は精々のところ、國家をまもつてその侵害または輕侮を受くるを防ぐものであるけれども、しかしその他の點に於ては國家を善くもしなければ悪くもしない。また例へば、立法者・裁判官・司法省吏その他のあらゆる官吏の如きも、その通常の職務に於て民心の向上に影響を及ぼすのほかに、國家を善くもしなければ悪くもしないのである。彼等の貢獻は安寧秩序を保持するにあり、これぞ彼等の生産する效用である』(戸田武雄譯第一分冊八一・八二頁)と。こゝにわれわれはミルの國家思想がどんなものであるかを見る。と同時にいかにそれが國富を中心とするかれの思想と結びついてゐるかを見なければならぬ。

ミルの國富の觀念は何よりもまづ『蓄積し得る』ものの觀念である。しかもそれは物財でなければならぬ。見やうによれば『蓄積し得る』ものは決して物財のみではなく、教育もまた一つの『蓄積』であるが、ミルはしかし一般的にさうは考へぬ。かれの富の觀念は物財と離れることができないのであるから、物財の生産に直接關係ある人間すなはち職人の技術・精力および忍耐は、特に國富の一部として計算されなければならぬ。あくまで物

財を中心とし、直接物財生産にたづさはる労働並びにその種の労働への自己養成的活動（習得者の活動）をもつて、『生産的労働』とするのである。——たゞし物財生産に関する労働の養成にたづさはる教育活動をも『生産的労働』に加ふべしといふ見解は述べられてをらず、むしろそのやうな結論に必然的に歸着すべき推理は中斷してゐるやうな觀がある。この分類に關するミルの思想は『經濟學上の若干の未決問題』以來のものであつた。かれは用語上の通俗的慣用を革めても一般にいゝ結果が生じないといふ理由によつて、『生産的』といふ用語例は論理的に規定するよりも實際的に規定する方が有利であると考へた。

しかしミルはまたいふ、直接的成果として物質的生産物を産出しない労働でも、それが窮極的な結果として物質的生産物の増加を來すかぎり、これを『生産的労働』と呼ぶを辭しないと。たとへば官吏の労働は種々の方法をもつて人民の保護をなし、それらは産業の繁榮に缺くべからざるものである以上、物質的の富に關してもこれを間接の『生産的労働』に屬せしめなければならないと。こゝには前後の論法に矛盾があるやうにもおもはれる。この間接および直接の論法をもつてすれば、産業教育のための一切の人間活動はもとより、科學研究のための活動をはじめとして各種の國民的活動はおほむね間接の『生産的労働』に包括されないものはないといふ結論に歸着せざるをえないわけであるが、ミルはかならずしもこの結論を力よく打ち出してはゐない。

III

しかるに一方、ミルは『不生産的労働』の範疇を遙に明瞭に論理的に規定する。それは物質的な富の生産に間接にも直接にもかゝはらざる労働である。「友人の生命を救ふほどの労働も、この友人が生産的労働者であつて

その生産するところが消費するところより多いものでないならば、生産的労働ではない』といふ言葉は最も端的にその思想を語る。ミルはあくまで物質的生産の總量を増加せしめるものと減少せしめるものとを職業別に二分しようとする。後者が多ければ多いほど、他の事情にして均しいならば、一國の物的生産物の貯藏は小ならざるをえない。不生産的労働は永久的利益の點においてすら生産的労働以上に有用なことがあり、逆に絶對的な浪費にすぎないこともある。しかしいづれにせよ、社會は不生産的労働の存在によつて富むことなく、かならず貧しくなる。不生産的労働の存在はとりもなほさず不生産的消費の存在だからである。たゞし一國がその不生産的労働を他國に賣つて富みうるのは、一個人がその不生産的労働を他人に賣つて莫大の報酬をうるができるのと同様である。

しかし生産的労働においても、生産を助ける以上に支出された部分が浪費であるのはいふまでもない。この浪費は技術的判斷あるひは經濟的判斷需要の測定)の錯誤から生じたものである。——ミルは技術的および經濟的の二つの範疇を、特に今日におけるわれわれのごとく範疇として明かに説いてゐるのではないが、しかし兩範疇を完全明快に區別したと同様の説明に到達してゐる。今日においてもなほ技術的および經濟的の二種の判斷問題は、經濟理論の領域において理解の普及を缺いた憾みがあるのであつて、ミルのこの點における例解の美事さは——こゝに紹介はしないが、直ちに移して今日の理論問題の説明に援用するに足るであらう。

労働における『生産的』と『不生産的』との分類の必要およびその基準目標は、おもふにミルにおいて労働そのものにあるのでなくて、一國における富の蓄積原理にある。しからば富の蓄積原理の考察に直接かゝはるものは労働ばかりではない。ミルが『原理』第一篇(生産論)の第二第三兩章において労働を論じながら、しかも消費

生活における合理性の問題すなはち消費における『生産的』と『不生産的』との區別をも論じなければならなくなつたのは大いに理由のあることである。いはく『社會の成員は悉くは労働者でないが、しかし悉く消費者である。かれらはみな、不生産的または生産的に消費する。生産にたいし直接もしくは間接になんらの貢献もしない人はすべて不生産的消費者である』と。ミルにおいて生産的消費者とはすなはち生産的労働者といふことにほかならぬ。が、生産的労働者の消費がごとく生産的消費なのではない。『かれらがその健康・體力および作業能力を維持改良するために、またはその後継者たるべき他の生産的労働者を教育するために消費するところのものは生産的消費である。』しかしその目的と必要とを超えた消費部分すなはち快樂もしくは贅澤のための消費は、だれがやつても不生産的消費である。たゞし享樂は労働の最大能率を發揮させるために必要な限度において、それらを必要物または必需の部類に入れなければならぬとする。

不生産的消費は消費對象の性質によつて決定するよりも消費の仕方によつて決定するものといはなければならぬ。しかし物財それ自體の性質上、先天的に不生産的消費の對象であるものとして、ミルは金モールやシャンペン酒などを擧げる。かれは最後にこれらの物財の生産に用ゐられる労働は生産的労働ではないと主張するまで論理をおひつめる。この論理は一般に不生産的消費に歸する物品の生産に供せられる労働に到達して、一つのデレンマに陥る。この種の労働もたしかに生産的労働であるといはなければならぬ。その生産物が社會の不生産的成員の手によつて消費されることに決するまでは、社會の富の中に屬するものだからといふのである。しかしミルが、金モールもシャンペン酒も消費されないうちは一國の富の一部だといつたのは、もはや労働分類の問題を逸脱したものだといはなければならぬ。

IV

かくしてミルは労働分類の考察から轉じて消費分類の考察に移つたのであるが、再轉して労働分類の考察にもどる。しかるに労働分類はいまや消費分類を通過した結果として、さらに深められた形をとらざるをえない。『生産的消費に物を供給するための労働と、不生産的消費に物を供給するための労働』といふ最後の二節(第三章第六節)がそれであつて、『一國の生産資源を維持し増加するために用ゐられる労働と、その他に用ゐられる労働との區別』こそ、一層重大な區別であるといふ。一國の生産物のうち、生産的に消費されるべきものは僅か一部分にすぎない。その餘はすべて生産者階級の不生産的消費および不生産階級の總消費にあてられる。もし年生産額のうち、生産的消費の用に供せられる高が、總額の半分を占めるとすれば、一國の永久的な富を成立たしめる仕事に従事する労働者は、一國の生産的労働者の半分にすぎない。他の半分は年々歳々消費され減失してまた還らざる物品を生産することゝたゞさはる。

しかし富める國において、年産總額の一大部分が不生産的に消費されるといふことは、(したがつて一層本質的には生産的労働の大部分がそれらの消費對象の生産部門に配分されるといふことは)直ちに悲むべきことではない。一國の生産高のうち、かゝる方面に供される部分こそは一國における單なる生活必需品以外のあらゆる需要をみたす基金であり、これこそは一國が生産的ならざるすべての目的を成就する力の尺度であると、——このミルの推理はわれわれから見ても、あらゆる意味で十分なものとはいひがたいのであるが、一國民の物質的總力の發展に關する考察では、今日におけるわれわれの理論的思惟のためにも多少の示唆を含まないわけではない。

が、われわれはさらにかれの資本に關する所説を聽くべく第四章にすまなければならぬ。

九四

ミルにしたがへば資本とは物財の再生産に用ゐられる富である。資本が生産にたいしてなすところは、必要な家屋・道具・原料をあたへ、他方においては従業中の労働者の生活維持の資料をあたへるにある。これらの目的に向けられる一切の物財が資本である。

たとへば一人の製造家がある。かれの資本の一部は營業用家屋の形を、他の一部は機械の形を、他の一部は原材料の形をとる。たゞし労働のための生活資料の形をとる資本部分は通例これを所藏することなく、その代り貨幣の形で所有する。これをもつて職工に賃銀を支拂ひ、そして職工はみづから生活する。かれはまた仕上用品を倉庫にもつ。これを賣上げて、さらに多くの貨幣を得、その貨幣をもつて再び労働者を扶持し、生産設備を修理し、原料を補充する。しかしそのやうな貨幣の一部は製造家自身の消費にあてられる。『すなはち彼は、貨幣と商品の賣上高との一部を用ひて、自分及びその家族の消費に充て、または馬丁及び侍者を傭ひ、或は獵馬や獵犬を飼ひ、もしくは自分の子女を教育し、或は納税し又は慈善をなす。』(前掲書第一篇第四章・邦譯第一分冊九七頁)

しからば右のうち、いかなる部分がかれの資本なのであるか？ ミルはこれに答へて『かれの所有物のうち、さらに新しく生産を營むために供せんとして備へられた部分こそは、その何物たるを問はず、いづれもまさに資本である』といふ。その意味を解説してかれは次ぎのやうに述べた。そしてこの解説こそラスキンが直接取上げて批判をくはへた部分にあたるのである。——『たとへば、こゝに資本家があり、この人は金物製造家であつて、

その資本は機械のほか目下のごとく鐵器のみであると假定する。労働者は鐵器を食つて生きることはできない。しかしこれらの鐵器の用途を變へるだけで労働者を養ふことができる。いまこの金物製造家は、その賣上高〔利潤〕の一部で獵犬または召使を置かうとしたが、しかし考をかへて、これを自分の事業に用ゐ、職工を増員し、増員した職工の賃銀としてこれを支拂つたと假定する。しからは労働階級はこのためにさらに食料を買ひこれを消費することができざるわけで、しかもこの食料たるや獵犬もしくは召使の消費すべかりしところのものである。かやうにしてこの雇主は食料に觸れもせず見もしないが、かれの行爲は國內に存する食料をそれだけ多く生産的労働者の使用に供し、また全然不生産的な消費をそれだけ減少したわけである。』（邦譯に準據、前掲分冊九七・九八頁）

この一節はなほつゞく。——「さて假定を變へて、この金物製造家が右の額を賃銀として支拂はず、召使や獵犬を養ふにも支出せず、銀器および寶石の購入に使つたとする。そしてさらにその結果を明瞭にするため、次ぎのやうに假定する。こゝに著しく變化がおこり、いままでは銀器および寶石を買入れるのに巨額を用ゐたが、今後はこの額を轉じて生産的労働者の方へ用ゐるにいたつたとする。……しからばその労働者は増加した給料をもつて銀器や寶石に費すことなく（より多くの）食物に費すであらう。けれども國內には（この年度は）餘分の食料なく、また前の場合のごとく召使または獵犬の食料を取上げてこれを生産に振向けるといふこともできない。……しかし資本家の出費が不生産的から生産的へと變つたことによる商品需要の變化の結果として、次年度には食料の生産は増加し、銀器および寶石の生産は減少するであらう。であるから、財産の何たるを問はず、およそ人がその一部を不生産的用途から轉じて生産的用途にあてるならば、たとひこの人は労働者の食料について直接なん

ら關知するところなくとも、生産的勞働者の消費に屬すべき食料を増加せしめるものである。しからは「資本」と「非資本」との區別は、商品の性質に存しないで、資本家の心——或用途に供しようとするかれの意向——に存する。」（前掲分冊九八・九九頁）

VI

以上、われわれはミルの『原理』第一篇の第三、第四兩章にわたつて、その論旨をほゞ誤るところなく紹述したつもりである。あまりに紙幅を費した不手際は責めを負はなければならぬが、しかしこの最後の部分に關するラスキンの批判が成功したものであるかどうかといふ問題はもはや多くを論ずる必要がないほど明瞭になつた。とは思ふが、ラスキンの批判は、——これもまた大いに慎重を期するため、その部分の文章をそのまま引用すれば次ぎのごとくである。

ジョン・スチュアート・ミル氏は、その資本の章において、資本家の例として鐵器製造家を擧げてゐる。この資本家は初め自分の商賣の利益の一部を費して銀器と寶石とを買ふつもりであつたが、のちに考をかへ、そして『それを増員した職工の賃銀として支拂ふ。』その結果はミル氏のいふところによれば、『より多くの食物が生産的勞働者の消費に充當される』ことになるのだといふ。

もしわたくしがこの一節を書いたならば、銀工はどうなるのだときつと訊かれるところだが、わたくしは尋ねない。もし銀工が眞に不生産的だといふなら、われわれはかれらの消滅にも文句はいふまい。そして同じ章

の別な箇所ではまたその鐵器商が若干の召使を節して、『かくしてそれらの人々の食物は生産的目的に用ゐられるやうに浮いてくる』となつてゐるけれども、わたくしはかうして召使が食物から離れることがかれらのうへに果してどういふ苦痛を齎すかどうかを問はないことにする。しかしわたくしは極めて眞剣に、なぜ鐵器は生産物であり、銀器はさうでないのかと糺問する。商人が一方を消費し一方を賣るといふことが、この相異の基をなすのではないことはたしかである。なぜならさう斷定するには商品は賣られるために作られるのであつて、消費されるために作られるのではないといふことが證明されなければならぬからだ。(尤もそれを證明することが日にますます商人の目的となつてゐるやうにわたくしはおもふのだが。)一つの場合には商人は消費者への送り届けの取扱人であり、もう一つの場合には自分が消費者である。¹⁾

けだし鐵器も銀器もともに財貨であるならば、勞働者は同價値の財貨を生産したわけであるから、かれらはいづれの場合にも均しく生産的である。

1) もしミル氏が消費と賣却との結果における相異を示さうと欲したのなら、氏は鐵器商人が自分の財貨を賣らないで自分で消費するものとすべきだつた。さうすれば氏の立場は一層薄弱となるが、しかし一層明瞭となつたであらう。そしておそらくこれが實際に氏のとらうとした立場なのであつて、氏が他の場所で述べ、わたくしが本論の最後で誤謬であること指摘したところの氏の學說、すなはち商品にたいする需要は勞働にたいする需要ではないといふ見解を暗々裡に含むものではないか。しかし、いま、わたくしが檢する一節をいかに懸命に精査しても、それが純然たる單獨の一謬説であるのか、それとも一層大きい謬説全體によつて支へられる一部分であるのか、わたくしは決定しかねるのである。それであるからわたくしはこゝでそれは唯一つの謬説であるといふ比較的好意ある假定のもとにそれを取扱ふことにする。

しからば兩者を區別するものは何か？ なるほどミル氏が經濟學とは何の關係もないと斷言(第三篇第一章

第二節)してゐるところの『道德學者の比較評價』においては、鋼鐵のフォークは銀のフォークよりも一層實質的な生産物に見えやう。それからナイフがフォークに劣らず善い生産物であることや、鎌も鋤も有用な物品だといふことなどをわれわれは承認してもよい。しかし銃劔はどうであらうか？ いま鐵器商人がかれの召使達やかれの銀工の食物を『解放すること』によつて、その銃劔を大量に生産することができたとして、——かれは依然として生産的労働者を雇用しつゝあるものなりや、それはミル氏の言葉をつかへば『永久的な享樂手段の貯へ』(第一篇第三章第四節)を増加する労働者といふことであるが。あるひは銃劔の代りに、かれがもし爆弾を供給するものとすれば、この精力的に生産的な物品(一箇十磅)の絶對最終の『享樂』は、それらが結果を生む時と場所との適當な選擇にかゝつてはゐないか？ いひかへれば、經濟學がなんら周知せずと稱する哲學的考察にもとづくところの選擇にかゝつてはゐないか？

われわれはこゝでラスキンからの引用を打ちきらなければならぬ。當時、イギリス經濟學の代表的著作であり、傳統的理論の最後の高峰であつたミルの『經濟學原理』が、こゝでは經濟學についてづぶの素人である一箇の美術批評家によつて、ひとたまりもなくあしらはれてゐる觀がある。問題になつてゐるミルの所説はすでに記述し、これにたいするラスキンの批評は文章のまゝ引用した。こゝにおいてわれわれは重ねて問ふ、果してラスキンのミル批判は正當であらうか？

われわれは二つの著作がいづれもすでに古典となつてゐることを考へ、しかも一方が他方に加へてゐる批評のいかに輕卒亂暴であるかを見、しかもその批評の背後をなす思想がいかに生命に充ちてゐるかを見、——それは後段において讀者の眼に迫る筈であるが、不思議の感にたへない。ラスキンがミルを批評することに失敗してゐるのは、かれの思想がミルのそれよりも淺薄だからでは決してない。ミルの著作を讀むことに親切が足りなかつたからである。ラスキンのミル批評は一般に理論的な著作にたいする批評家が最も普通に胃しやすい過ちであるところの解釋の謬りの一例であり、しかもその誤りは、ラスキンが近代經濟學にたいして特に性急な批評家であつたといふことから生じたものなのである。ラスキンにして、眞にどうしても發表しなければならぬかれ独自の思想をもつてゐるものならば、(かれはそれをもつてゐた)、その思想の發表は一方においてミルの學說にたいして最も正當な理解を示してこそ、對照的にこれを表現することができ、またそれによつて一層たしかな自己表現に到達することもできたであらう。あだかもフリトドリッヒ・リストがアダム・スミスの學派に對した場合のごとくである。しかるに事實はこれに反して、ラスキンの場合においてはかれはミルの學說を正當に理解せず、誤つた解釋のうへに立つてミルを批評し、そしてそこから獨りよがりの方法で自己の欲する結論への道を作りだしたのである。その結論の性質が、ミルによつて代表されてゐる經濟學にたいして、根本的に自己を主張するに足るものであることは、われわれもこれを疑はない。——いな、ラスキンのそのやうな結論を一片の結論にとゞまらしめることなく、これを新たな體系にまで展開することこそ、殘された問題であるとわれわれは信するものである。しかしそのやうな仕事はまづ既成の體系にたいして剩すところのない理解を前提するのであつて、たゞさうすることによつてのみ、全く新しいものが何であるかもまた明瞭となり、さらにすゝんでは二つの體系の

総合的把握といふことも、一つの問題となるべき可能性を孕むにいたるのである。

VIII

ラスキンのミル批判について、われわれは最初に問題を四段にわけ、第一にミルの學說、第二にラスキンのこれにたいする理解、第三にラスキンの批評といふ順序を追ふべきことを約した。そしてこれら三つの事項は最も具體的な形で讀者の前に提出されたわけであるが、しかしそれらはまだ原文の羅列的引用に近く、かならずしも事態を明かにしたのではないとおもふので、次に最も簡潔に以上の事項の要領を摘出してみたい。

第一にミルの學說である。ジョン・スチュアート・ミルが勞働を二つに大別した理由は、一國の物質富の蓄積原理を明かにするにあつた。かれがこの見地を最初に明かにしてゐれば誤解の餘地はなかつたかもしれぬ。しかし全體としてかれの所説はこの點において不明瞭を非難されるほど曖昧なものではない。しばらくミルのために辯ずれば、かれは富の蓄積原理をもつて一國民の繁榮を支配する根本であると考へた。この見地は必然的にかれの認識を永續性のある物質財の領域に局限した。といふよりも、むしろその領域とその他の有用性の領域とを截然と區別することに重心點をおかした。かれは語義そのもののために定義を求めたのではなくて、むしろ原理認識のために定義を求めたものだといふことができる。蓄積性の富すなはち物質的な富の増大を左右するものは、他の事情にして均しいかぎり、物質的な財貨の生産に従事する者の員數の大小である。一國民の職業的活動は多岐にわかれ、そして經濟的活動はまさにその大部分を占めるものであるが、しかし經濟的活動は以上の見地から二分される。物質的な財貨の生産に直接間接従事するものと、さうでないものとである。一國において前者の占め

る割合が後者の占める割合より多ければ多いほど富の蓄積に有利であることは算術的に明瞭である。しからばこの見地から一切の國民的勞働を二つに大別して考へることは、實際上においても、理論上においても、きはめて重要であるといはなければならぬ。それを名づけて『生産的勞働』と『不生産的勞働』とすることが果して適當であるかどうかは別な問題であるとして、すくなくともミルのいはんとするところが何であるかは一應明瞭である。

しかしミルは富の蓄積原理に關する目的論的考察をこの程度にとゞめておくことはできない。あくまでこの見地から事物を考察するとき、かれは遡つて『生産的勞働』に従事する人々を維持するための勞働と、その他の人々を維持するための勞働といふもう一つの分類に到達せざるをえない。おもふにこの分類は一國における一切の勞働を二分した最初の分類と異り、生活資料すなはち消費材の生産に従事する勞働全體について、特定の類別をおこなふものである。一國における消費財の總體は國民生活の維持のためのものであるが、しかし飽くまで物質富の蓄積といふ目的論的觀點からこれを見れば、かゝる生活資料の消費は、その意味で合目的性のものとさうでないものにと二分されなければならぬ。それは物質富の生産に従事する者すなはち『生産的勞働者』によつて消費されるものと、その他の人々によつて消費されるものとの區分にほかならぬ。しからば生活資料の生産に従事する勞働の總體は、事實上生産的消費にそれを供給してゐる者と、不生産的消費にそれを供給してゐるものにと二分することができるであらうと、ミルはさういふのである。が、注意すべきはこゝでは最初の分類のごとく勞働そのものに固有の性質が分類の規準をなしてゐないといふこと、勞働の結果としての生産物の處理または用途の決定から遡及して、勞働そのものの分類を試みようとしてゐることである。

序ながらミルの『生産的消費』の概念が、物財の生産過程のみならず、労働そのものの生産過程に關しても適用され、人間生活における消費の合目的性が、労働の供給といふ客觀的な規準によつて限定されてゐるといふことは注意に値する。古典派におけるこの觀點の骨格が、かりに資本家的世界觀と結びついたものであるとしても、しかしその骨格は、民族的または全體主義的世界觀のうへに立つべき『政治經濟學』の組成においても、或は梁材として役だつてはあるまいか、——これは當面の問題からは些か遠いことであるが、序をもつて一言しておく。

さて、ミルの『生産的』といふ用語の意味は以上をもつてとにかく明瞭であるが、かれはこのやうな思想を前提として、資本の説明に入つたのである。かれが用ゐたのは鐵器製造家の設例である。まづ第一の假定では、この資本家は利益の一部で獵犬または召使を置いたとする。が、氣をかへて、これを自分の事業にむけ、職工を増員したとする。しからは労働者階級は、さもなくば獵犬もしくは召使の消費すべかりし食料を買ひ、これを消費することができぬ。つまりかうした雇主の方針變更は、國內の食料をそれだけ多く生産的労働者の使用に供し、反面ではそれだけ不生産的消費を減じたことを意味する。つぎは第二の假定である。資本家は利益の一部で銀器・寶石の類を購入してゐたとする。が、氣をかへて、これを職工の増員にむけたとする。けれども國內には第一の假定におけるごとくにして取上げるべき食料はない。しかし次年度には食料の生産は増加し、銀器の生産は減少するであらう。それは要するに生産的消費に歸すべき一國の食料を増加せしめるものである。

『資本』と『非資本』との區別を説くために、なぜこのやうな二つの假定を列擧する必要があつたか、われわれはしばらくそれを問はぬこととする。また第二の假定における銀工の最初の賃銀はどうなつたか、われわれはそれを問はぬこととする。問題は銀工の労働が『生産的』であるかどうかである。しかるにミルの見解によれば

銀工の労働が『生産的』でなくて『不生産的』であることは、すでに第三章において説きつくされたことであつた。それは金モールを拵へる労働やシャンペン酒を造る労働と同列にあるものである。なぜそれらの製作は一般に『不生産的』であるか？なぜならそれは不生産的消費にむけられるべく先天的に定められたものであるから。——しからばミルにおける『不生産的労働』といふ用語は二重の意味をもつ。一つは物質的財貨の生産に關係のない労働の意味である。他の一つは物質的財貨の生産に關するものであるが、しかし性質上その用途を生産的消費にむけることのできない財貨の生産にかゝる労働の意味である。

IX

以上をもつて第一の問題たるミルの學説は何かといふことはその要點を明かにしたものとす。第二はラスキンのこれにたいする理解である。しかし、さきの引用箇所の前半を一見すればもうそれで明瞭なやうに、ラスキンはいさゝかもミルの『原理』第一篇第三章に述べられた『生産的』および『不生産的』といふ二つの語義の規定を讀了してゐない。いはんやミルがそのやうな定義を必要としたところの問題の自覺そのものが感知されてゐない。繰りかへしていふが、その問題とは一國における富の蓄積を左右する事情は何かといふのである。『生産的労働』に關するミルの定義は、この問題の自覺と不可分に結びついたのであり、またこの問題によつて限定されざるをえなかつたものである。これにたいして『なぜ鐵器は生産物であり、銀器はさうでないのか』といふ風に糺問し、そして『生産的』といふ用語の代りに『生産物』といふ用語をすりかへたのは、表面的にせよ、ミルの所説を一層愚かしいものやうに取扱つた嫌ひがあるのみではない、その前提をなす第三章の叙述を全然没却

したところの、いはゞ行きあたりばつたりの無責任千萬な糺問であり、ミルの理論にたいする理解の全き缺乏の表明であり、批評として價値なきものである。

しかるにラスキンの批評はそこで終るのではなくて、そこで始まるのである。かれはミルが國民經濟的見地から銀器の生産と鐵器の生産との意味の相異を主張した理論上の根據を理解することなしに、しかし全く他の方面から兩者を區別することの意義を認めることによつて、ミルの結論を——兩者の區別に關する結論のみを、承認したのである。他の方面とはいはゆる哲學的・道德的考察であり、そしてそれはミルにしたがへば經濟學的考察とは無關係のもの、またラスキンにしたがへば逆にそれなくして經濟學的考察は不可能なものである。ラスキンがミルにおける『生産的』といふことの問題の意味を誤解したまゝで『生産物』の意味に轉じたのは、さうすることによつてとにかくかれ自身の哲學的・道德的考察を導入することができたためであつた。この手順がいかに巧みにおこなはれてゐるかは、銀器と鐵器との比較から各種の鐵器相互の比較に轉じて銃劔にいたり、さらに轉じて爆薬におよび、そして最後にそれらの生産物の有用性の問題を提起したところにかゝはれるであらう。ラスキンによればこれら一切の財貨はその道德的有用性において、一方では先天的に且つ客觀的に優劣のあるものであり、また他方ではその使用における時と場所との選擇の如何にかゝはるのであるが、この選擇における適不適の根柢にもまた哲學的考察が横はるのである。われわれはしかしこれをもつてわれわれが最初に分割した四つの問題のうち、第三の問題を過ぎてすでに第四の最後の問題にさしかゝつてゐることを注意しなければならぬ。幸にしてそれは讀者の記憶されてゐるごとく、ラスキン自身の思想は何であるか、といふのであつた。

しかるにラスキンのミル批判は以上をもつて終つたのではない。かれは飽くまでミル批判の形式を維持しながら、自己の思想を展開してゆく。生産物の問題は有用性の問題を経て価値問題となる。ラスキンはかれの地盤においてリカードおよびミルの価値論を批評し、価値問題の反面としての能力および能力蓄積の問題を提起し、残された需要面の分析をも示唆する。しかし最後に来るものは経済目的論である。それはもはや他の學説の批評ではなくて、經濟學者ラスキンの根本思想であり、古典派經濟學にたいするもう一つの學派の成立を豫言するものである。われわれは大體順序を追うてラスキンを跡づけてみなければならぬ。

ジョン・スチュアート・ミルは、物の『有用性』*usefulness* について、『欲望を充たしまたは目的に適ふ能力』といふ定義をあたへた。この定義は銀にも鐵にも同様に適用され、したがつて兩者の區別を明かにすることができない。これは眞の定義ではない。眞の定義は別に樹立されなければならぬ。と、これがラスキンの価値論の冒頭にあらはれるミル批判であるが、ミルの定義は『原理』第三篇(交換論)第一章(価値)第二節から引用された。

ラスキンの引用はきはめて短く、右の箇所にとゞまる。讀者にしてミルの書物を手許におかぬかぎり、その後で何が述べられてゐるかを察知することはできぬ。この第二節は『使用価値・交換価値および價格の定義』と題し、価値の二義に關する有名なアダム・スミスの所説が批評を受けてゐるのはこの場所である。使用価値および交換価値の二概念の發展および兩者の關係に關する理論は、イギリス經濟學における價值論史の骨格をなすものであり、われわれは他の場所でこの見地から價值問題の發展を取扱つた。(拙著『經濟本質論』第四章参照) アダ

ム・スミスが最初に兩概念を樹立した時には、使用價值をもつて交換價值の成立に關係なきものとしたこと、使用價值は人生論的または道德論的な意味における價值であつたこと、これを轉化して『科學的』な概念たらしめたものはリカアドオであつたことをわれわれは指摘した。リカアドオにおける意味の轉化は重大であるが、しかしはめて簡單に、讀者の氣のつかぬうちに行はれたことをも指摘した。ミルはいふまでもなくリカアドオの繼承者である。が、かれは改めてアダム・スミスの價值概念の批評に立ちかへる。それはすでにキンシーによつてなされたところであつたのではあるが。

いま、ミルの有用性すなはち使用價值概念を検討するラスキンは、ミルの定義をもつて眞の定義に到達したものではないといひ、眞の定義は哲學的なものでなければならぬといふ。もしさうであるならば、リカアドオやミルがアダム・スミスの使用價值概念を變更したことは却て不當であり、そしてラスキンはスミスの辯護者として立たねばならぬわけだ。しかるにラスキンがこの問題について一言もアダム・スミスに關説しないのは奇妙である。スミスの使用價值概念がラスキンのそれと一脈通ずるものがあることは前掲の場所であつた。われわれの指摘したところである。

ラスキンはしかし使用價值の眞の定義がミルにおいては偶然な機會に認められるといふ。それは誤つた言語上の定義のかけに潜在し、一兩度不用意のあひだに現れたるものであり、たとへば『原理』第一篇第一章第五節における『すべて生命または力を養ふもの』といふごときがそれであると。この第五節は初版以後削除されたやうであるが、わたくしはまだ十分に調べるいとまをもたぬ。しからばラスキン自身の言葉によつてそれはいかに述べられるか、またそれはかれの經濟目的論といかに結びついてゐるか、われわれはなほ後段においてそれを見るであらう。

ラスキンは使用價值問題の他の一面として、使用者における使用能力の問題を提起する。ミルが交換價値の根柢にありとする有用性は、その物に固有の性質によつて決定するとはいへ、それと相對する人の使用能力の程度または有無によつて、またその人數の多寡によつて、左右される。またミルが交換價値の根柢にありとする快適性は、これまたその物に固有の性質によつて決定するとはいへ、それと相對する人の性情の如何によつて、左右される。しからば經濟學は人間の能力および性情に關する科學たらざるをえぬとラスキンは主張する。

ラスキンはミルの定義に満足せず、リカアドオに移る。『利用(效用)は交換價値の尺度ではないが、交換價値に絶對不可缺のものである』とはリカアドオの言葉であるが、しかしこれとてもかれを満足せしめることはできない。また鹿と海狸との交換を例解とした勞働價値の原則もそのまゝかれを満足せしめるにはたりない。『需要が不變であるとき、價格は生産に要する勞働量によつて變化するといふことは、かれ(リカアドオ)が商業上の經驗からえて、しかもそれを分析することのできなかつた一般觀念である。すなはち前章(第三論文)においてわたしがあたへた公式を用ゐていへば—— y が不變であるときは x は y にしたがつて變ずるといふのである。しかし需要は x が明かに變化する以上、窮極的に不變ではありえない。それは價格が騰れば消費者が減ずるからである。さうして獨占といふことが行はれるやいなや、(しかもすべて物の稀少は一種の獨占の一形態であり、したがつてどんな商品でも屢々多少は獨占的色彩を帯びる) y はその價格の最も有力な條件となる。』——この理論的な叙述は補註の一節であり、それからあとに限界利用學說の一端に一層接近した形跡を示すものが續くのであるが、しかしわれわれの當面の目的に鑑み、それらにはしばらく觸れず、そして直ちにかれの價値論の核心に飛びこむこととする。

XI

ラスキンは價值問題を導いてその基礎を倫理問題たらしめるべく、『價值』value といふ言葉の語源を *Valorem* に求める。その主格は *valor* ヴァロル であり、ヴァロルは *valere* ヴァレレ から出た言葉である。ヴァレレとは健康であること、もしくは強いこと、——人間についていへば、生活において強いこと、すなはち『勇氣ある』valiant こと、物についていへば、生活のために強ふこと、すなはち『價值ある』valuable ことを意味する。〔—strong in life (if a man), or valiant; strong for life (if a thing), or valuable.〕であるから『價值ある』valuable といふことは『生活のために有益な』avail towards life といふことである。眞に價值ある、もしくは有益な物とは、その全力をもつて生命に導くものの意味である。物はその生命に導かざる程度またはその力の損ぜられた程度にしたがつて、その價值あることを減じ、生命に反する方に導くにしたがつて、それは反價值的であり、有害である。——これはラスキンの叙述そのまゝである。およそ『價值』の論理はラスキンにおいて人生の目的そのものと結びついたものであり、人生の部分にすぎざる快樂性・快適性などと直接に結びついたものではない。すべての人および物の『價值』は、窮極的な生活目的とのかゝりあひによつて、階層的に順位をあたへられるのであり、そしてその階層はつひに反價値の領域につづく。

ラスキンにおける『價值』の客觀性は、もとより倫理的考察によつて附與されたものであり、この倫理は個人的・主觀的なものを超えてゐるのである。それは同時にかれの信ずる經濟學そのものである。物の價值は人の意見や物の分量とは無關係であり、その物に固有のものである。もし國民が幼稚の状態にあつて、眞珠や青や赤の石

ころのやうな他愛のないものを『價値ある』ものと信じ、そしてそれらを与えるために水にもぐり、土を掘り、それをまた様々の恰好に切つたりなどして、生活の擴充と向上とのために用ゐるべき勞働の大量を費すならば、これにたいして眞に偉大なる經濟學は何が虚であり實であるかを教へなければならぬ。また國民がおなじ幼稚の状態にあつて、空氣や日光や清潔などのやうな貴重なるものを『無價値』と信じてゐるならば、あるひは國民がそれなくしては到底何物も眞に所有することも使用することもできない筈の生存の諸條件を、——たとへば平和、信賴、愛のごときものを、黄金や鐵や眞珠などと交換してもよいと信じてゐるならば、これにたいして眞の經濟學は何が虚であり何が實であるかを教へるものでなければならぬ。ラスキンの信ずる經濟學はさういふものである。それは眞の意味において『生活の科學』であつて、財貨の科學ではない。それが根本的に倫理的であるといふことは『生活の科學』に固有の運命である。

『價値』の根本義をさう規定したラスキンは、つゞいて富とは何であるかを説く。ミルは『富むとは有用な物品の大きな貯へを所有することである』と定義したが、かれは一應これに同意する。その代り、『有用』および『所有』の意味を検討する必要があるとする。——第一に『所有』である。富は單なる物品の所有ではなくて、それを使用しうることに、もしくは使用の能力あることを意味するものでなければならぬ。所有は絶對の力ではなくて階段のある力であり、所有された物の分量や性質にもとづくのみならず、所有者にとつての適合性と、それを使用する人の生活力にもとづく。富とはわれわれが使用しうるどころの有用な物品の所有だといふことになる。富の蓄積は材料の蓄積とともに能力の蓄積を伴はずしては無意味だといふことになる。

第二に『有用』である。ラスキンが物の有用性をもつて一般に物そのものに固有のものとしたことは他の場所

見たとほりであるが、こゝではむしろ物の有用性はその所有者または使用者の如何によつて決定することが強調される。或人々の手にあつて有用の物も、他の人々の手にあつては害用となる。ひとり物ばかりではない。身體そのものといへども、利用もされ濫用もされる。訓練よろしきをうれば、それは戦争のためにも勞働のためにも國家の役に立つのであるが、しかし訓練されず濫用されたときには、國家には無價値なものとなり、たゞ私的な單獨な生存をつづけるにすぎない。『——ギリシヤ人は、なんら國家に直接の用をなさぬことに従事してゐる人を表すギリシヤ語(註・イデオス)から、かういふ身體を名づけて「イデオティック」(idiotie)または「私的な」(private)身體と呼んだ。で、つまり、英語の「白痴」といふのも、全く自分だけのことに没頭してゐる人の意味である。』(363)

要するに物の有用性は、物に固有の性質にとゞまらず、それを有用に用ゐることのできる人の手にあることを條件とする。さらに正確にいへば、『有用』とは ヴァリアント valiant な人の手にある value であるといふことになる。こゝにおいて富の科學たる經濟學は、富の生産または富の蓄積の科學としては、材料の蓄積とともに併せて能力の蓄積を論ずるものでなければならず、富の分配の科學としては、絶對的分配ではなくて、差別的分配を論ずるものでなければならぬ。差別的分配の原理は適當な物を適當な人に分配するのである。富とは畢竟するに『valiant による valuable の所有』であるといふことに歸する。富をもつて一國民のうち存在する力として考察するに當つては、物の value と、その所有者の valour といふ二要素を、一緒にして評價する必要がある。

このやうな事物の考へ方は、これを言ひあらためれば第一には物の生産と併行して人間能力の生産をもつて經濟本來の生産の課題とするものであり、一切の財貨の國民的生産に關しては勞働配分における道德的秩序の樹立を前提するものであり、したがつて無用の物や有害なものは初から生産されず、さらに第二には物と能力との結

合における合理性を規準とする富の分配をもつて經濟本來の分配の課題とするものである。ラスキンの思想表現における窮極點はなほこの先にあるのであるが、一應こゝでは以上の解釋をあたへておく。

XII

われわれはラスキンの思想表現における文學的な力づよさを、すでに幾度か犠牲にしたことを斷つておかなければならぬ。その深みのある即物的な論證や例證は、讀者が疑はずに支配を受けてゐる近代的な思考方法を、——一般に常識化してすでに『科學的方法』であることすら忘れられてゐる思考方法を、瞬間にして破壊し、讀者を『科學』以前の人生的立場に引きもどす。近代經濟學の幾つかの基礎概念は、いづれも裏返しにされ、讀者はもはやそれらにすがつて安心してゐることはできなくなる。われわれはラスキンが直觀によつて事物の本質に肉迫し、これを表現するのに屢々意外の機智をもつてした例證の幾つかをこゝに紹介するいとまをもたぬ。しかしそれらの思想表現は、一つの理論が人を導く以上の力をもつて、時として人を理論以前の世界に引きもどす。その世界たるや、科學的な一切の思考方法が生成分岐する以前の、しかもその世界を遊離しては科學的方法の成立そのものもまた空虚に歸するところの、渾然たる生活認識の世界であり、そしてそれは反面において、たゞちに常識の世界に通ずるところの世界なのである。

さて、生産物、有用性、使用價值(または單に價值)、富などといふ經濟學上の基礎概念を、もつぱらミル批判の形式をもつて順次に検討しつゝ、それらの諸概念が哲學的・道德的考察と無關係に構成されるとする見解のゆるしがたいことを逐一論證することに努めてきたラスキンは、つゞいて價格すなはち交換價值の検討にうつる。

しかしそこで一旦ミルを離れる。

一一一

ラスキンにしたがへば『利潤』profitは交換からは生れない。profitといふのは羅典語の *profitio* から來たので、これは『前に作るごと』(making in advance)または『のために作るごと』(making in favour of)を意味し、労働(生産)にのみありうることである。種播きと刈入れとによつて一升の穀物を二升にするのが利潤である。交換をおこなふために労働が必要だとあれば、それは生産に含まれてゐるのであるから利潤を生む。が、交換そのものには少しも利潤はない。交換にともなうて何等かの利得があるならば、それは他方にそれだけの損失があることを意味する。しかも交換において利得を獲るためには相手方の無智が前提されなければならぬ。しからばかかる交換の科學は『闇の科學』である。公正な交換の法則は、當事者双方に利益があり、その仲介者たる商人はその時間と知慮と労働にたいして正しい報酬を受けるものでなければならぬ。當事者双方の受ける利益と仲介者の報酬とは、いづれも關係者一同に知れわたつてゐなければいけない。つまり仲介としての商業についてラスキンは手數料主義を主張してゐるものだといふことができる。これもまた道德的交換論であり、そしてかれの交換價值論はすべての物の價は最後には労働をもつて計算すべしとする労働價值思想に屬するのである。

ラスキンはつぎに労働の性質を定義し、労働を分類するのであるが、しかしその叙述の當初においてはミルの分類と對照されてをらず、ミルの分類は憶ひだされもしない。それはもはやミルの分類にたいする批評としての形式において述べられてゐない。労働については、労働そのものの道德的性質に關する考察と、労働が振りむけられる方向または目的に關する道德的考察とがある。兩者は同一の問題ではない。ラスキンはこの點に心づいたのであるが、しかしそれを深く追究しない。かれは労働を最も簡單に積極的および消極的の労働に大別しようと

する。それはしかし事實において人間の一切行爲の分類である。——『積極的労働とは生命を生産する労働を、消極的労働とは死を生産する労働をいふ。最も直接に消極的なものは殺人であり、最も直接的に積極的なものは子供を産み且つ育てることである。それゆゑ無爲を中心として、その消極的方面では殺人が憎むべきであるとおなじ程度で、積極的方面では育児は嘆美すべきである。』(S72)

子女を産み、育てることが、あらゆる生産のうちの最高のものであるといふ。——われわれはさきにラスキンが道徳的な能力の蓄積をもつて、材料の蓄積とともに、『富』の蓄積に不可缺の二要素であると説いたのを見たが、およそ蓄積は生産を前提する以上、能力の蓄積は正確にいへば能力の生産および蓄積の意味であつたといはなければならぬ。いまやかれは能力生産の問題を超えて人間生産の問題に入つたのである。人間の生産については、種子や畑が賞讃を受けない。單に『生みつける』ことではなくて、親が子を『育てる』ことが嘆美されるのである。『世人が一瞬の努力によつて一つの生命を救つた人をだれでも熱誠をもつて賞讃しながら、多年にわたる努力と自己否定とによつて一つの生命を創造する人になりたいしてはひどく控目にか賞讃しないのは妙なことである。われわれは「市民救助」の褒賞をあたへてゐる。——が、なぜ「市民産出」の褒賞をあたへないか。尤もわたくしのいふ意味は、肉體のみならず、精神においても十分に産出することである。』(S72)

われわれはたゞちにこの思想をわが事變下の人口政策にむすびつけようとは考へてをらぬ。すくなくともさうすることによつてラスキンの思想の現實性を一般讀者に押しつけようとは考へてをらぬ。われわれの當面課題は、財貨中心の價格科學を起えて、いかに人間中心の經濟學を樹立すべきかにあり、その目的にたいしてラスキンの經濟思想がいかなる示唆をあたへるかにある。

なほすゝんで労働の分類についてラスキンが最後に説くところを見るに、労働はその結果において前述のごとく多種多様であるからして、一國民の繁榮は生命の手段となるものを生産し且つ使用するために費される労働の分量に正確に比例するといふ。しかるにこれはすでに前段の國民の富に關する考察において述べられたことの繰りかへしであり、なんら新たに加へるところはない。われわれはむしろ國民労働の生産的な總配分が、國民的生命の發展および向上といふ窮極目標にむかつて、一義的に形成されてゆく體系化の構想を、われわれ自身の中心問題として憶ひだすにしくはない。

XIII

すでにラスキンの思想をもつてすれば、經濟の目的は物財そのものになくて人間にあり、あるひは人間生活にある。畢竟するに人間生活における窮極目的こそ經濟そのものの目的である。一國の富または繁榮は、したがつて物財の蓄積においてのみ考察することはできぬ。問題はつねに生活にあり人間にある。物財の生産、分配および交換を論じて經濟學の課題終れりと信じてゐる經濟學者は、經濟の根本問題を自覺しないものである。なるほど近代經濟學がラスキン以後消費論を追加したのは事實である。しかしそれは交換論のための消費論にすぎず、ラスキンを満足せしめる何ものでもない。ラスキンがめざしたのは人間生産のための消費論であり、生命實現のための消費理論であつた。ミルが『生産的消費』を論ずるにあつて、物質富の増加を齎す消費のみを指してゐたことはラスキンの指摘するところである。物財生産における消費のみならず、労働者における衣食の消費をも、ミルが『生産的消費』の範疇に入れたのは注意すべき事實であるが、しかしそれは飽くまで一貫して物質富

の蓄積といふ見地から限定的に考察されたものであつた。

しかるにラスキンはミルのいはゆる『生産的消費』にたいして最終消費の意義を對擧し、これを『絶對消費』*consumption absolute*と名づける。すはく、『經濟學者は通例絶對消費にはなんらの利益もないかのやうに斷言してゐる。それはたゞにさうでないばかりでなく、絶對消費は生産の目的、極致、完成である。しかも賢明なる消費は賢明なる生産以上に遙かに困難な技術である。金錢を儲ける人二十人にたいして、これを使ひうる人は一人しかない。だから個人にとつても國民にとつても死活の問題は、「どれほど金を儲けるか」でなくて、「何の目的にそれを費すか」である。』(S22)と。——賢明な消費は賢明な生産以上に困難な技術であるといふ。この言葉は今日のわれわれの理論的な意識からすれば特に注意すべき言葉である。もし生産といふ言葉を國民的な總生産の意味にとれば、『死活の問題』はむしろ總生産における目的秩序の決定にある。なぜといつて、それは同時に國民的消費の目的秩序の決定を意味するのであるから。また生産といふ言葉を個別的な技術の課題の意味にとれば、事物の本質からいつて、『賢明なる消費』の方が、技術的課題としての生産よりも、『死活の問題』であるといふのは正當であるといふことができるであらう。

つぎに資本の定義がくる。『資本』*capital*とは『頭、あるひは源泉、あるひは根源材料』(*head, or source, or root material*)を意味する。それは何か派生的な第二次的な財貨を生産するための材料である。資本以外に何ものをも生ぜぬ資本はたゞ根が根を生むやうなものである。資本にたいしては、つねにそれが生命のために何を供給するかを問はなければならぬ。ラスキンはなほ資本に關して二三の見解を披瀝するのであるが、それはしきりに消費論の方へ回歸し、そしてかれの根本思想はつひに最高の表現に到達する。——『すでに述べたごとく消費

は生産の極致であつて、國民の富はその消費するところによつてのみ評價される。』(S75)『經濟學 (political economy) の最後の目的は消費の良い方法と多量の消費とを得るにある。別言すれば、あらゆる物を用ひて、しかもそれを氣高く用ゐることである。それが物質であらうと、勤勞であらうと、物質を完全ならしめる勤勞であらうと種類を問はぬ。』(S76) ラスキンはふたゝびミルの鐵器論の批評や、商品にたいする需要は勞働にたいする需要ではないといふミルの學說の批評を試みる。が、もはやそれらの點には觸れるにもおよばまい。『國民にとつての問題は、どれだけ多くの勞働を使役するかではなくて、どれだけ多くの生命を生産するかである。けだし消費が生産の終局であり目的であるごとく、生命こそ消費の終局であり目的であるのだから。』『わたくしは一聯の序説的論文の稿を結ぶにあたり、つぎの一大事實を明かに述べたいとおもふ。富何ものぞたゞ生命あるのみ。生命とは、その中に愛と、歡びと、讚仰とのあらゆる力を包含するのである。最も富める國とは、最も多數の高貴にして幸福なる人々を養ふ國であり、最も富める人とは、自己の生命の機能を極限まで完成せしめ、そのうへになほ、その人格により、その所有物により、人々の生命にたいして最も廣く有益な影響をおよぼす人である。』(S77) われわれはすでに第二論の末尾において『すべての富の窮極の成果と完成とは、おそらく元氣に満ちた、眼の輝いた、快活な人間をできるだけ澤山つくることにある』といふ主張を見たことをおもひだす。

われわれになほラスキンの思想を追跡する餘地があるだらうか？ こゝまで來てかれの經濟學の性格を論ずることは、あだかも何等かの事物に投射した光線を見ないで、光源體そのものを見るの感をあたへないだらうか？ ラスキンはしかなほ筆をおさめず、さらに數段におよんで人口問題、賃銀問題、厚生問題としての土地および自然の問題、家庭生活における精神的側面の諸問題を論じ、そして最後に贅澤の問題に到達する。『此最後の者に

も』が贅澤の問題をもつて結ばれてゐるといふことは、一見して奇異のやうであるが、決してさうではない。近代生活の經濟的側面における根本問題が、最も單純な、眼に見える形としてあらはれてゐるのは、いふまでもなく貧窮者の生活であるが、それと同時に、おなじものがもう一つの別な、一層眼に見える形としてあらはれてゐるのは、生活上の贅澤である。ラスキンは贅澤をもつて一般に罪であるとも不可能であるとも考へるのではない。しかしすくなくとも現在のところでは、暗愚な者でないかぎり、贅澤を心から享樂することはできないといふ。こゝにおいてよみがへるものは基督教的精神の理想なのである。

ラスキンはなぜ贅澤を生産問題として論じなかつたのか？　しかし、かれは贅澤品の生産に關する問題としては特に論じなかつた。しかし眞珠や寶石のやうな有用ならざるものの社會的生産に關してかれの論じたところはすでに見たとほりである。かれはそれらの生産を廢止すべしとも禁止すべしとも一言も主張しなかつた。かれは國家が國家自身の力をもつてそれらをなすべきであると考へた形跡を微塵も示さなかつた。かれの信ずるところでは一般に人類の眞の幸福は公共の努力によつて増進するよりも、各個人の努力によるのである。國策や國法の改正よりも最初に必要なものは各人の家におけるそれらの樹立である。『すべての眞の經濟は「家の法」である。』(§84)——かれはわれわれを導いて economy といふ言葉の最初の意味に、すなはちギリシャ語の意味に、復歸せしめるのである。

XIV

われわれはおもふ、理論經濟學から政治經濟學への轉化といふ現代の一般問題のなかには、きはめて多くの、列擧に堪へぬほど多くの、問題が伏在してゐることを。近代經濟學の財貨學的性格から脱却し、そして言葉の眞

に嚴密な意味における『政治經濟學』の理念を樹立したものはラスキンであるが、かれの根本思想は、いかなる學者もその科學的な取扱の方法について安全な着想を見いださなかつたものであり、われわれもまた以上の取扱ひにおいて新しい成功を収めたと誇るだけの勇氣をもたぬことを告白しなければならぬ。かれの人間經濟學的な想念が、生活經濟學的なものを含みながらしかもそれを超えてゐることは、さきに指摘したところであるが、この想念をいかにして理論的な構想にまで引きあげることができらうか？ もしわれわれにしてラスキンを機縁としてプラトンまで還らなければならぬとすれば、それはどういふ意味において、さうなのであらうか？ われわれはそれらの問題を考へてみなければならぬ。

ラスキンの學説は近代經濟學にとつて全くの異物であり、われわれのこれまでの科學はかれを批判しうるために必要な振幅をもたぬといふことは、これもまた最初に指摘したところである。われわれは道德、政治、經濟の諸問題を、いづれも一環性において、それぞれ全體的な問題の部分としてあつかふところの學問の立場をとることによつてのみ、——科學の立場ではなくして學問の立場をとることによつてのみ、ラスキンを正當に取扱ふことができるのである。ラスキンはしかしそのやうな全體的な學問の立場をみづから樹立したのではない。かれはたゞその方向の示唆をあたへるのであり、そしてかれの論法はわれわれを導いて近代的方法以前における事物の未分化の状態に、直觀的な生活事態の中に、歸らしめるのである。

附記。本文を草するにあたり、『Unto This Last』の邦譯二種（石田憲次譯・訂正改版『此の最後の者にも』大正十二年四月發行、西本正美譯・岩波文庫『この後の者にも』昭和三年三月發行）のお蔭を蒙ること多大であつた。いづれ兩譯書にたいする表敬の機會をえたいとおもふが、同時に多少の所見をも述べたいと考へてゐる。